令和８年度　美津島中学校のあゆみ
―結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について―

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様に説明責任を果たすことが重要であると考え、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、学校が各調査の結果や各調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、各調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにし、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

Ⅰ「全国学力・学習状況調査」の調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

１　全国学力・学習状況調査

※英語はICT端末等を用いた、文部科学省CBTシステム（MEXCBT）によるオンライン方式（CBT＝Computer Based Testing）で実施。

学年 実施月日		生徒数（人）	平均正答率（%）		平均無解答率（%）		平均IRTスコア 英語4技能 （）内は3技能（参考）
			国語	数学	国語	数学	
３　年	学校	140	54	47	8.0	16.2	454（457）
	大阪市	－	60	55	5.4	11.4	497（499）
4月23日	全国	－	63.9	57.0	4.9	10.4	499（499）

※IRTとは、国際的な学力調査等で採用されているテスト理論です。
　この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じものさし（尺度）で比較することができます。
※IRTスコアとはIRTに基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すものです。

調査結果とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について

成果と課題

【成果と課題】
〇全国学力・学習状況調査結果
〈国語〉
本校の国語における平均正答率は54.0%であり、大阪府や全国の平均を下回る結果となった。領域別では「書くこと」が60.4%と比較的高い正答率を示した点が成果として挙げられる。一方で、「話すこと・聞くこと」（49.8%）や「読むこと」（50.2%）に課題が残る。問題形式別では、選択式（63.7%）に比べ、短答式（45.0%）や記述式（31.6%）で正答率が低下しており、思考力・判断力・表現力を問う設問への対応が課題である。また、無解答率も8.0%と全国平均（4.9%）より高く、文章を深く読み込み自らの考えを根拠とともに表現する粘り強さの育成が必要だと考察する。
〈数学〉
本校の数学における平均正答率は47.0%であり、大阪府や全国の平均に対して課題が見られる。領域別では「数と式」が59.6%と一定の定着が見られたものの、「データの活用」（39.0%）、「図形」（41.2%）、「関数」（41.9%）で正答率の落ち込みが目立つ。観点別では「知識・技能」（53.0%）と比較して「思考・判断・表現」（27.0%）の低さが顕著に見られる。さらに、記述式問題の正答率が27.0%にとどまり、無解答率も16.2%と全国平均（10.4%）より高い状況である。解法プロセスを筋道立てて表現する思考力と最後まで解き進める粘り強さの育成が急務だと考察する。
〈英語〉
本校の英語における4技能の平均IRTスコアは454（全国499）となり、改善が必要な現状が明らかとなった。技能別では「聞くこと」の平均正答数が1.1問（全国1.2問）と概ね全国水準を維持している点が成果だが、「読むこと・書くこと」は1.8問（全国2.5問）と差が見られる。IRTバンド分布では、バンド1・2の層が計54.9%を占め、基礎的な英語力の定着に課題を抱えている。長文の情報を正しく読み取る力や自らの考えを英文で表現する活用力が不足しており、語彙・文法の定着と合わせた実践的な言語活動の充実に向けた取組が必要であると考察する。

今後に向けて

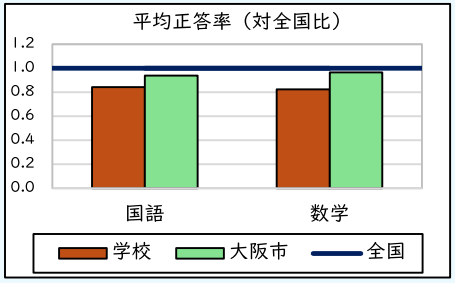
【今後に向けて】

今後は、単なる知識の習得にとどまらず、思考力・表現力を高める授業改善の徹底が当面の課題である。特に、主体的に学びに向かう態度や、情報を多角的に読み解く力の育成に注力する必要がある。あわせて、教員間の指導法共有や組織的な授業研究を進め、児童生徒一人ひとりのつまずきに寄り添ったきめ細かな支援体制を構築することが求められる。

令和８年度　全国学力・学習状況調査　教科に関する調査結果の概要（国語・数学）

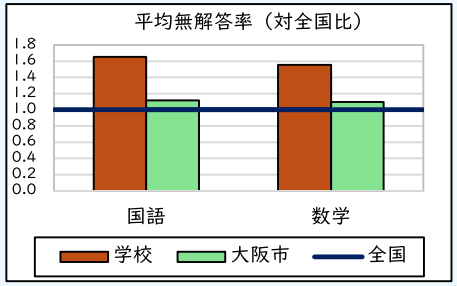
平均正答率（%）

	国語	数学
学校	54	47
大阪市	60	55
全国	63.9	57.0



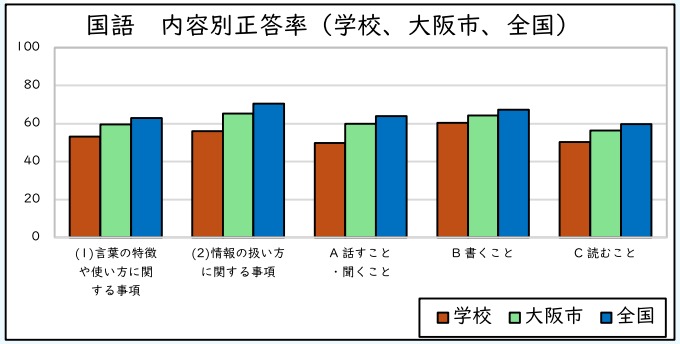
平均無解答率（%）

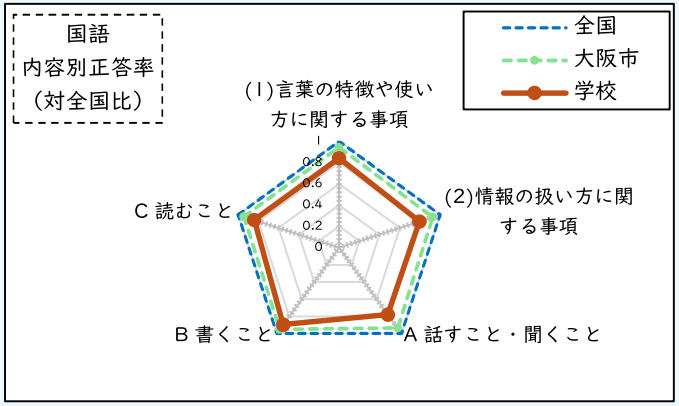
	国語	数学
学校	8.0	16.2
大阪市	5.4	11.4
全国	4.9	10.4



【国語】内容別正答率

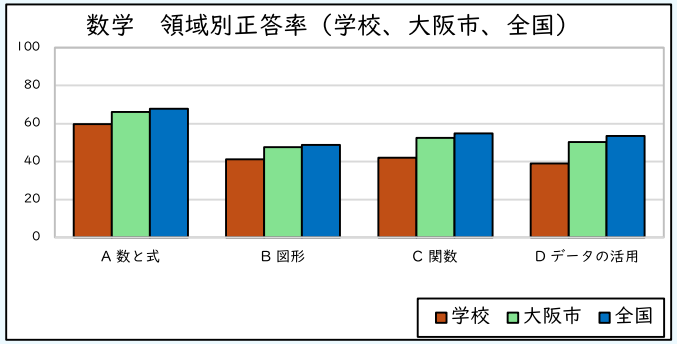
学習指導要領の内容	対象問題数（問）	平均正答率（%） 学校	大阪市	全国
(1)言葉の特徴や使い方に関する事項	5	53.1	59.5	63.0
(2)情報の扱い方に関する事項	1	56.0	65.3	70.4
(3)我が国の言語文化に関する事項	0	－	－	－
A 話すこと・聞くこと	3	49.8	59.9	63.9
B 書くこと	3	60.4	64.2	67.4
C 読むこと	3	50.2	56.3	59.7

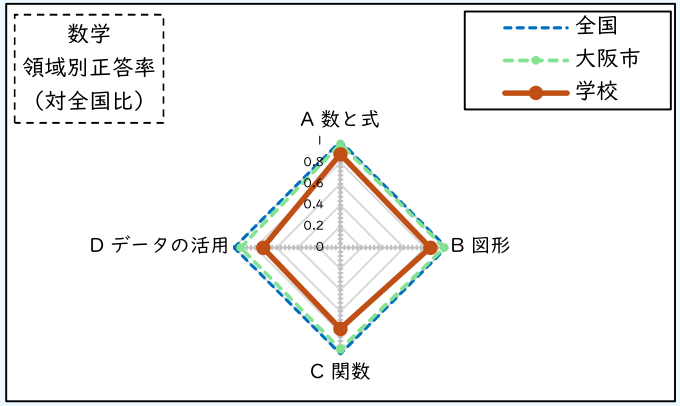




【数学】領域別正答率

学習指導要領の領域	対象問題数（問）	平均正答率（%） 学校	大阪市	全国
A 数と式	5	59.6	66.1	67.8
B 図形	4	41.2	47.6	48.7
C 関数	3	41.9	52.5	54.8
D データの活用	4	39.0	50.2	53.5

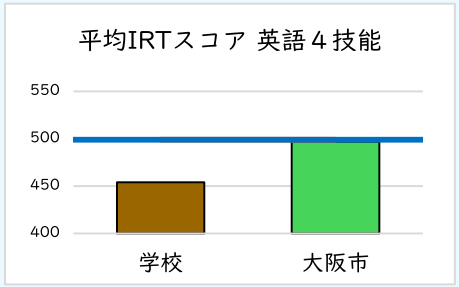




令和８年度　全国学力・学習状況調査　教科に関する調査結果の概要（英語）

英語　平均IRTスコア

学校	454（457）
大阪市	497（499）
全国	499（499）



※４技能の平均IRTスコアです

※（　）内は３技能の平均IRTスコアです

【IRT(Item Response Theory：項目反応理論）とは】

児童生徒の正答・誤答が、問題の特性（難易度、測定精度）によるのか、児童生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童生徒の学力スコアを推定する統計理論です。

この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じものさし（尺度）で比較することができます。

【IRTスコアとは】

IRTに基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すものです。

導入する年（中学校英語は令和８年度）の全国平均を基準値とし、経年比較が可能な形で算出します。

【IRTバンドとは】

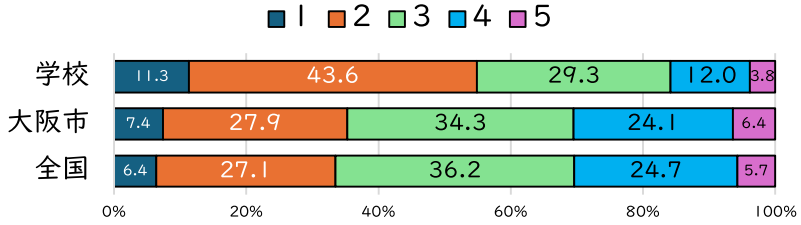
IRTスコアを１～５の５段階に区切ったものです。３を基準のバンドとし、５が最も高いバンドとなります。

※IRTスコア・IRTバンドは、難易度の高い問題にしていると高めに、難易度の低い問題に誤答していると低めに算出されます。

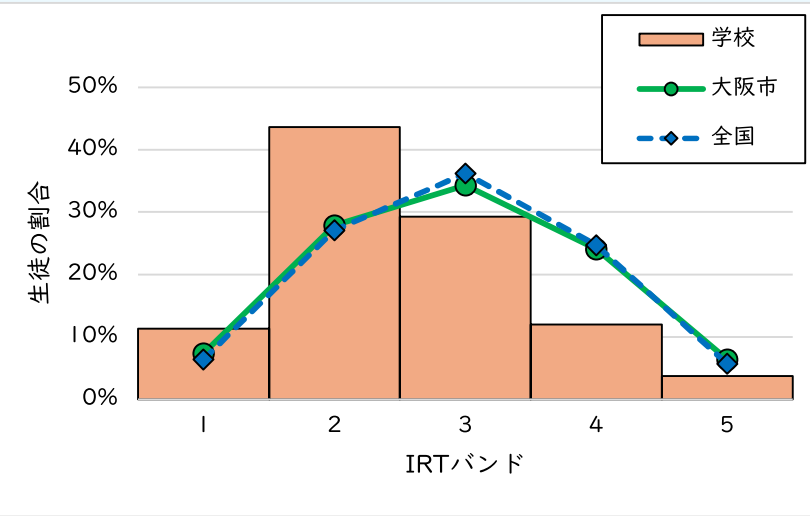
	IRTバンド分布比較（４技能）				
	１	２	３	４	５
学校	11.3	43.6	29.3	12.0	3.8
大阪市	7.4	27.9	34.3	24.1	6.4
全国	6.4	27.1	36.2	24.7	5.7

※４技能のIRTバンド分布です

IRTバンド分布比較（４技能）



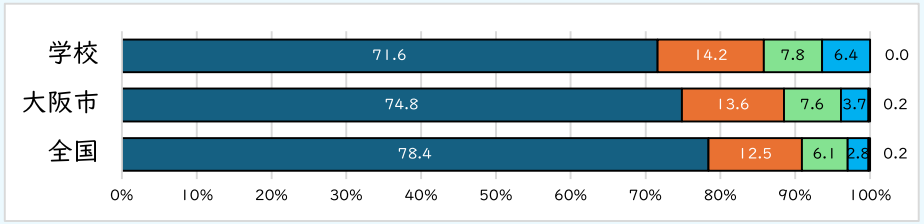
IRTバンド分布グラフ（４技能）



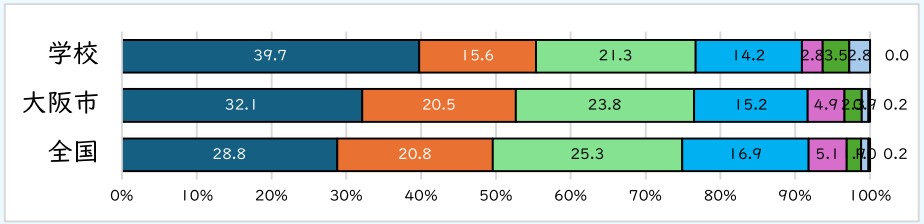
生徒質問調査より

※集計値を四捨五入するため、横軸合計が100.0%にならない場合があります。

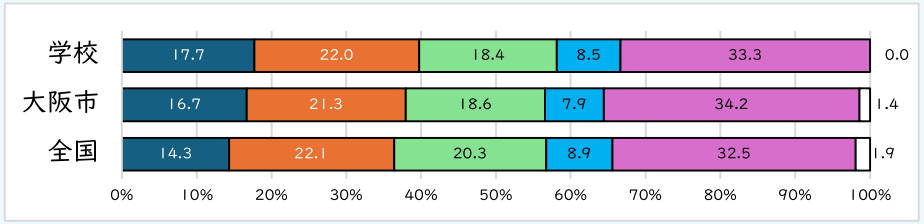
質問番号	質問事項
（1）	朝食を毎日食べていますか
（4）	普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、スマートフォンや携帯電話、パソコン、タブレット、ゲーム機、テレビ等（以下、「スマートフォン等」）でSNSや動画視聴などをしますか（スマートフォ
（7）	学校での悩みについて、あなたの親や家族は、どれくらいあなたと話しますか
（8）	自分には、よいところがあると思いますか
（13）	困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか



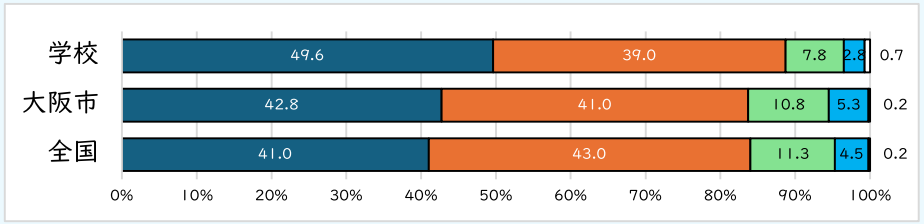
1 している
2 どちらかといえば、している
3 あまりしていない
4 全くしていない



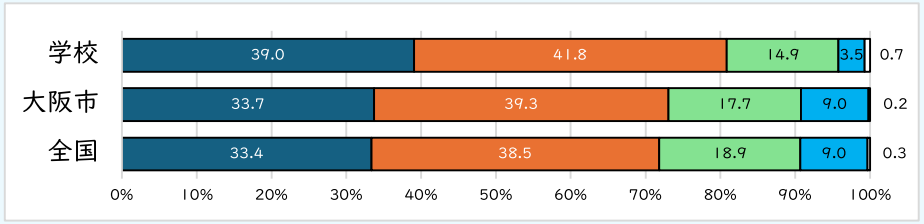
1 ４時間以上
2 ３時間以上、４時間より少ない
3 ２時間以上、３時間より少ない
4 １時間以上、２時間より少ない
5 ３０分以上、１時間より少ない
6 ３０分より少ない
7 スマートフォン等を持っていない



1 ほぼ毎日
2 週に１～２回
3 月に１～２回
4 年に１～２回
5 ほとんど、または、全くない



1 当てはまる
2 どちらかといえば、当てはまる
3 どちらかといえば、当てはまらない
4 当てはまらない



1 当てはまる
2 どちらかといえば、当てはまる
3 どちらかといえば、当てはまらない
4 当てはまらない

学校質問調査より

※集計値を四捨五入するため、横軸合計が100.0%にならない場合があります。

質問番号	質問事項
（7）	調査対象学年の生徒は、熱意をもって勉強していると思いますか
（11）	調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、学校生活の中で、生徒一人一人のよい点や可能性を見付け評価する（褒めるなど）取組を行いましたか
（13）	スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーによる教育相談に関して、生徒が相談したい時に相談できる体制となっていますか
（41）	調査対象学年の生徒に対して、学級生活をよりよくするために、学級活動で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法等を合意形成できるような指導を行っていますか
（90）	調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、家庭学習について、生徒が自分で学ぶ内容や学び方を決めるなど、工夫して取り組めるような活動を行いましたか

